

中国人学習者の語用論的能力の特徴 —断り表現をめぐって—

日本語教育領域 李贇

キーワード: 語用論的転移 意味公式 中間言語的方略

1. はじめに

中国人学習者は、状況に応じて適切に言語を使用することができないために、誤解を招くケースが多く見られる。このような語用論的誤りは、人間関係を悪化させるかもしれない、人格上の欠点とみなされる可能性がある。従って、学習者は、第二言語そのものを学習するだけでなく、語用論的能力を身につけなければならない。本研究では、中国人学習者のメッセージアプリでの断り表現に焦点を当て、学習者の語用論的能力の特徴を考察した。

2. 先行研究

本章では、「語用論的能力」に関する研究を紹介する。藤森(1994)は、中国人日本語学習者の断り行為を、日本語母語話者と中国語母語話者のそれと比較した。「代案」の提示は、日本語母語話者にはあまり見られなかったが、日本語学習者の場合は使用頻度が高い。これは母語からの語用論的転移であると判断された。水野(1996:71)は学習者の発話には、母語にも目標言語にもない語用論的・中間言語的な方略が見られることを報告している。一方、吉田(2011:15)は、韓国人学習者が日本人に対して断る場面において、母語からの語用論的な影響はほとんど見られなかったと述べている。

日本語学習者の語用論的能力に関して、どのように転移しているか、母語からの語用論的な影響があるかをまだ明らかにしてない。本研究は、学習者の断り表現について、日本人母語話者と中国人母語話者とのを比較し、学習者の語用論的能力の特徴を考察したい。

3. 調査概要

本研究は、日本人母語話者、中国人母語話者と比較しながら、中国人日本語学習者を調査対象として、「授業後、英語の研究調査を手伝ってほしい」という依頼の内容を設定して、親疎上下関係によって、「授業担当の先生」、「指導教員」、「親しくない同級生」、「親しい同級生」という4つ場面からなる談話完成テストを使用して調

査を行った。

4 調査結果

本章では、日本人母語話者と中国人母語話者の表現と比較して、親疎上下関係によって、日本語学習者の断り表現はどのような異なりがあるかを分析していく。

4.1 意味公式の使用頻度と内容分析

ここでは、それぞれの意味公式を順々取り上げて分析する。

4.1.1 「詫び」

「詫び」は相手の意向に添えないことを負担に感じている旨を表現して、お詫びを述べる。「申し訳ございません」「すみません」「ごめんなさい」など様々な形で現れたが、謝罪の気持ちが現れているものを「詫び」に分類した。

日本人母語話者は親疎上下関係に関わらず、各場面で全員「詫び」を使用した。一方、中国人母語話者の使用頻度は日本人母語話者より、各場面で低かった。特に、親しい同級生に対する場合で、中国人母語話者は「詫び」を使用したのは僅か3割である。

母語、母語文化からの影響を受けた日本語学習者は、断るとき日本人母語話者のように全員に「詫び」を使用することができないと考えられる。一方、日本語学習者が「詫び」を使用した頻度は、親しい同級生の場合でも、中国人母語話者よりかなり高い。日本語学習者は、学習すれば学習するほど「詫び」に関する知識が増えて、関係修復するために「詫び」を使用する頻度が高くなる。すなわち、日本語学習者はある程度母語、母語文化からの影響を脱して、日本語語用論的能力が発達していると考えられる。

4.1.2 「理由」

「理由」は断らざるをえない状況を説明する。「用事がある」、「疲れたから」などの表現が現れて、「理由」に分類した。

日本語学習者と母語話者を比較すると、日本人母語話者と中国人母語話者は親疎上下関係に関わらず、各場面で8割以上に「理由」を使用した。日本語学習者は日本人母語話者と中国人母語話者のようになんか高い頻度で「理由」を使用したというわけではない。日本語学習者は上級に達しても、何か自分の言いたいことがあってもそれがうまく伝えられないという可能性があり、正しく使えるまでには時間がかかると筆者は考えている。

4.1.3 「結論」

「結論」は依頼に対して応じないことをはっきりと述べる。「行けないです」、「できないです」などの表現を「結論」に分類した。

本稿の調査で、従来の結論と異なる結果が得られた。日本人母語話者は親疎上下関係に関わらず、各場面で「結論」を高頻度で使用した。これに対して、日本語学習者は親疎上下関係に関わらず、各場面で「結論」の使用頻度は低かった。

日本語学習者は日本語の曖昧性を明示的に教えられる。日本語と日本の文化に関する知識が増えるにつれて、直接的な方略を避けることができるようになる。しかし、もともと言語のルールというのは、そう簡単に説明しきれるものではない。したがって、日本語学習者は場合によって、適切な表現を把握できず、親しい同級生に対しても、「結論」のような直接的な表現を避けるという可能性はあると考えられる。

4.1.4 「断りの暗示」

「断りの暗示」は相手の意向に添えない旨をすらすら言わず、自分の心情を相手に察してもらう。「都合はちょっと」「難しいです」などを「断りの暗示」に分類した。

日本語学習者は日本語の曖昧性を理解したうえで、「結論」を代わりに「断りの暗示」を日本語母語話者より高い頻度で使用した。特に言いさしの「ちょっと。」「都合はちょっと。」のような言い方が高い頻度で現れた。「ちょっと」は初級段階の授業や教科書などで、断る場合に使用されると教えられる。形がより単純で使用しやすいし、学習者が最も早く習得する言い方で、言語化が容易な方略であると筆者は考えている。

一方、「都合はちょっと」「ちょっと」のような「断りの暗示」は日本人母語話者の調査では現れなかったが、「難しいです」「厳しいです」のような例は僅か4回出てきた。すなわち、日本人母語話者は「断りの暗示」を代わりに、「結論」を使用して断る傾向がある。これは、日本人若年層は、これまでの日本人らしくなく、婉曲より直接的な言い方をするようになってきている可能性があると考えられる。

4.1.5 「次回への期待」

「次回への期待」は約束や共感の気持ち、同意の陳述など積極的な意見を述べる。「明日はどうですか」「また今度誘ってください」など次回への期待を示しているものをこちらに分類した。

日本語学習者と日本人母語話者は、ほぼ同じ使用率で「次回への期待」を使用した。一方、中国人母語話者は48.1%で、日本語学習者と日本人母語話者より2倍ぐらい使用した。

また、「次回への期待」の内容について、日本人母語話者と中国人母語話者では、

ポライトネス・ストラテジーの選択の仕方に違いが見られた。「明日はどうですか」のようなポジティブ・ポライトネスのストラテジーは、日本人母語話者40人は各場合にわずか6例であったが、中国人母語話者40人で55例であった。中国人母語話者は、相手のポジティブ・フェイスに訴えかける表現が好まれる傾向があると考えられる。一方、日本人母語話者40人は各場合に「また今度やります」「ご都合のいい日」のようなネガティブ・ポライトネスのストラテジーが81.2%という高い頻度で使用された。日本人母語話者は、次回への期待を述べる際に、相手のネガティブ・フェイスに配慮した言語行動を行う傾向があると考えられる。

日本語学習者と日本人母語話者は、ほぼ同じ使用率で「次回への期待」を使用した。また、日本語学習者は、「明日」「ほかの日」のような日程を変える意向を伝える回答と、「また今度やります」のような相手のネガティブ・フェイスに配慮した表現がほぼ半数ずつ使用された。すなわち、日本語学習者の表現は母語・日本語のどちらの言語使用上の傾向とも一致しておらず、母語にも、目標言語にもない特徴の存在を示唆している。

4.1.6 「呼びかけ」

「呼びかけ」は、相手の名前を示して、敬意を表す。「先生」などの表現を「呼びかけ」に分類した。

日本人母語話者は各場面で「先生」「～さん」のような「呼びかけ」を全く使用しなかった。一方、中国人母語話者は、親しい親友の場合では使用しなかったが、授業担当の先生と指導教員の場合に「先生」をかなり高い頻度で使用した。

中国人母語話者は、親疎関係にかかわらず、上位の人に対してのフェイス侵害度を減らすために、「呼びかけ」を使用する傾向があると言える。また、日本語には「呼びかけ」のほかにも敬意を表す手段があり、日本人母語話者は各場面で「呼びかけ」を使用するわけではない。

日本語学習者は、中国人母語話者より、授業担当の先生と指導教員の場合に、「先生」のような「呼びかけ」を使用する頻度が低かった。すなわち、日本語学習者はある程度まだ母語から影響を受けているが、日本語を勉強すればするほど、敬意の表現を多く習得する。さらに、「呼びかけ」の使用率が低くなり、語用論的能力が発達していると思われる。

4.1.7 「共感」

「共感」は、相手の意向に添いたい気持ちを表す共存意識の表明の意味公式である。「やりたいですが」、「せっかく言ってくれたのに」などの表現を「共感」に分類した。

日本語学習者は、日本人母語話者や中国人母語話者より、「共感」を多く使用した。特に、日本語学習者は「せっかくですが」「せっかく～のに」を10回、「行きたいですが」を7回使用した。中国人母語話者は「行きたいですが」のような「共感」を8回使用した。

日本語学習者は、初級段階で「せっかく」を重要な文法項目の一つとして教えられる。したがって、日本人母語話者より、やや高い頻度で使用している。母語にも目標言語にもない語用論的・中間言語的な方略であると考えられる。一方、日本語学習者は中国人母語話者のように、共感の方略として、「行きたいですが」も使用した。これは母語からの影響を受けて、母語の方略を借りたものと考えられる。

4.1.8 「代案」

「代案」は、代わりとなる別の人物を紹介したりして、解決案を示す意味公式である。「～さんに頼んでみたらどうですか」、「代わりを探そうか」などの表現を「代案」に分類した。

「代案」は、ほかの意味公式より、使用頻度が低く、任意性の高い方略であり、使用に個人差があると思われる。

4.2 場面による意味公式の使用頻度

親疎上下関係によって、どの程度の断り表現を使用しているかを分析する。

授業担当の先生に頼まれた場合、相手との社会距離が遠く、親しくない。つまり、相手に配慮する程度が高いので、日本語学習者、日本人母語話者、中国人母語話者のグループとも、授業担当の先生に対して最も多く意味公式を使用した。

日本人母語話者は各場面に高い頻度で意味公式を使用した。一方、中国人母語話者は、親疎関係にかかわらず、上位の人に多く意味公式を使用した。そして、親しくない同級生より、指導教員に対して、多く意味公式を使用した。すなわち、日本人母語話者は親疎関係を優先しているが、中国人母語話者は上下関係を優先しているという傾向がある。

日本語学習者は、中国人母語話者と同じく、同級生より、授業担当の先生と指導教員に多く意味公式を使用した。すなわち、母語・母語文化が親疎上下関係に関する認識に影響しているので、日本語学習者は、親疎関係より上下関係を優先していると言える。

5. まとめ

学習者は初めから教わったとおりに目標言語を作っていくのではなく、独自の中間言語体系を作り、それが常に修正しながら徐々に目標言語体系に近づけて、語用論的能力を発達させていく。このことを示唆する結果が、本論文の研究により示された。

「理由」と「詫び」は、日本語と中国語での表し方が似ているので、学習者の母語

知識によって習得が促進され、「理由」と「詫び」を身につけやすくなる。一方、親疎上下関係の認識に関して、日本語学習者は、母語・母語文化からの影響を受けているので、中国人母語話者と同じく、親疎関係より上下関係を優先している傾向があると考えられる。

大関(2010:81)は、基本的なもの・使用頻度が高いものなどが無標とされ、逆に、特殊的なもの・使用頻度が低いものなどが有標とされるようになったと述べている。すなわち、単に目標言語と母語の違いが習得に影響するだけではなく、学習項目の有標性が高いか低いかが習得の困難度に影響を与える。「断りの暗示」は、とくに「ちょっと」というストラテジーは形がより単純で有標性が低いので、母語と違っていても習得は困難ではなく、頻繁に使用された。むしろ、過剰使用の傾向があると筆者は考えている。

また、「次回への期待」「呼びかけ」「共感」は母語・日本語のどちらの言語使用とも一致しない傾向が見えた。

「次回への期待」の内容に関して、ポライトネス・ストラテジーの選択の仕方に違いが見られた。「明日はどうぞですか」のようなポジティブ・フェイスに訴えかける表現と「また今度やります」のような相手のネガティブ・フェイスに配慮した表現を半分ずつ使用した。これは日本語にも母語にもない使用傾向である。

「先生」のような「呼びかけ」は、母語から借りたストラテジーとして使用されたが、ほかの敬意表現も習得してきているので、使用を控える傾向があることが分かった。

「共感」は、「せっかく～ですが」のような表現が習ったばかりで、高い使用頻度で使用された。母語にも目標言語にもない共感の方略として、頻繁に現れたと思われる。また、「行きたいですが」のような表現も、母語からの影響を受けて、共感のストラテジーとして、頻繁に現れたと思われる。

すなわち、断りに関して、日本語学習者の語用論的能力の発達は、母語にもない日本語もない中間言語が形成された可能性があると考えられる。

6. おわりに

本研究では談話完成テストで調査を行った。この方法は数種の言語を比較するという面では優れているが、現実の談話ではないので、調査の妥当性という課題が残る。また、メッセージアプリでの特徴として、絵文字や顔文字などの非言語表現の使用も断り表現に影響を与える。今後、今回の分析結果を踏まえ、自然談話における「断り」の収集及び分析等により、さらなる調査研究が望まれる。

参考文献

- Brown, P. & S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals In Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上優. 2013. 『相席で黙ってられるか—日中言語行動比較論—』. 東京: 岩波書店.
- 池田優子. 2009. 「中級の口頭表現能力を伸ばす指導を考える—学習者の断り表現における『理由』をめぐって—」 『日本語と日本語教育』 第37号, 155-175.
- 伊藤恵美子. 2002. 「マレー語日本語母語話者の語用論的能力と滞日期間の関係について—勧誘に対する「断り」行為に見られる工学系ブミプトラのポライトネス」 『日本語教育』 第115号, 38-52.
- 大関浩美. 2010. 『日本語を教えるための第二言語習得入門』. 東京: くろしお出版.
- 竹本紗世. 2011. 「言いわけにみる配慮の表現—断り談話にみる言いわけ—」 『東京女子大学言語文化研究』 第20巻, 57-73.
- 高橋優子. 2012. 「これまでの日中「謝罪」表現研究の問題点と今後の課題」 『文化外国語専門学校紀要』 第25巻, 1-8.
- 西村史子. 2007. 「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」 『世界の日本語教育日本語教育論集』 第17巻, 93-112.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』 東京: 研究社.
- 藤森弘子. 1994. 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー: 『断り』行為の場合」 『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』 第1巻, 1-19.
- 水野かほる. 1996. 「依頼の言語行動における中間言語語用論—中国人日本語学習者の場合」 『名古屋大学言語文化論集』 第18巻, 57-72.
- 蒙韵. 2010. 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの考察」 『異文化コミュニケーション研究』 第22巻, 1-18.
- 吉田さち. 2011. 「断りのメール文における働きかけの背後にあるもの—韓国人日本語学習者を対象とした質的調査の結果から」 (口頭発表) 第7回日本語実用言語学国際会議(3月5~6日、サンフランシスコ州立大学).